





CONTENTS

●年次報告書の刊行にあたって・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

2020 年度

■シンポジウム・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
シンポジウム『ジェンダーを巡り変化するメディア』・・・・・・・・ 10

■特別講義・講演会・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」・・・・ 14

■学生企画イベント・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 17
コロナ禍で感じたジェンダーギャップ—大学生は何を感じたか—・・・・ 18

■研究プロジェクト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21
A「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」・・・・・・・・ 22
B「オンラインメディア空間における自己表象によるジェンダーとファッション」・・・・ 23

●ジェンダーセンター運営委員一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25
●ジェンダーセンター運営委員会議事録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 26



2021 年度

■定例研究会	29
「ファッションとアイデンティティ——ジェンダーやルッキズムの問題を考える」	30
■特別講義・講演会	35
「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」	36
■他機関との連携・協力	39
共催 「社会に蔓延するミソジニー」	40
■研究プロジェクト	45
A「企業のダイバーシティ推進の実態調査」	46
B「デジタルメディア時代の流行現象を通して形成される規範的ジェンダー像」	47
●ジェンダーセンター運営委員一覧	49
●ジェンダーセンター運営委員会議事録	50
■業績一覧	51
ジェンダーセンター運営委員業績一覧	52
●編集後記	55





年次報告書の刊行にあたって

2020年度からセンター長を拝命しております、牛尾奈緒美と申します。2010年4月に情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターが開設されて以来継続してセンター員、開設時から2015年度までは副センター長として活動に従事してまいりました。近年の目まぐるしい時代変化に際して、「ジェンダー」「ダイバーシティ」「承認」の3つの軸を運営方針に掲げる本センターの存在意義を改めて実感するとともに、運営にあたっては既存の枠にとらわれず新たな展開をもたらせるよう努めて参りたいと思っております。

まずは、ここに昨年度から今年度にかけての本センターの活動報告書をご提示いたします。世界的な感染症の拡大の中、大学における研究・教育活動は様変わりし、本センターの活動も従来とは異なる視点や形式で運営されることとなりました。特に昨年度はコロナ禍の影響が大きく、予定されていたシンポジウム等の中止や変更を余儀なくされましたが、徐々にニューノーマルへの適応が進み、この2年間にさまざまな活動成果が得られました。

2020年度は、10月にオンラインシンポジウム「ジェンダーを巡り変化するメディア」(津田環氏:テレビマンユニオン, 立野真央氏:NHK名古屋拠点放送局 制作部 ディレクター, 伊藤あかり氏:朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長, 田中洋美氏:明治大学情報コミュニケーション学部准教授)が開催され、大手メディア企業と本センターとの連携企画が実現いたしました。また、例年行われている学生企画におきましても同大手新聞社との協業が図られ、1月に学生企画「コロナ禍で感じたジェンダーギャップ—大学生は何を感じたか—」が実施されました。さらに、これまで大学主催の『アカデミック・フェス』内で企画され本センターは共催の形で実施してきた「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」が、2020年度からは本センターの主催イベントとなり、開催形式もこれまでの対面からオンラインによる特別講義方式へ変更されました。昨年度は12月に安瀬聖司氏:アクサ・ホールディングス・ジャパン株式会社代表取締役社長兼CEOと、田代桂子氏:株式会社大和証券グループ本社取締役兼執行役員副社長を、今年度も12月に高原豪久氏:ユニ・チャーム株式会社代表取締役社長執行役員と、漆紫穂子氏:品川女子学院理事長をお招きし、企画兼ファシリテーターは両年とも筆者担当で開催いたしました。

今年度は他にも、12月にオンラインシンポジウム「社会に蔓延するミソジニー——ニッポンのミソジニー」(上野千鶴子氏:明治大学国際日本学部特別招聘教授, 東京大学名誉教授と、筆者)の共催や、1月には当センター主催の第1回定例研究会「ファッションとアイデンティティ——ジェンダーやルッキズムの問題を考える」(蘆田裕史氏:京都精華大学デザイン学部准教授, 同学副学長と、田中東子氏:大妻女子大学文学部教授, 東京大学情報学環客員教授, 高馬京子氏:明治大学情報コミュニケーション学部准教授)を開催いたしました。

大きな環境変化を受けながらも、この2年間に数々の研究や啓蒙活動を執り行うことが



できましたことをまことにありがたく思っております。これもひとえに多方面から本センターにご関心をお寄せくださり、ご協力やご参加をくださる皆様のご支援の賜物と深く感謝申し上げます。また、平素から活動推進にご尽力くださる運営委員の先生方や事務局スタッフの皆様にも厚くお礼を申し上げます。

今後も本センターは、柔軟かつ学際的な視点からジェンダーを起点とした研究・教育・社会連携活動を行い、多様性を承認する社会の実現を目指して参ります。引き続きご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

2022年2月20日

明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター長

牛尾奈緒美

2020 年度





シンポジウム



シンポジウム 『ジェンダーを巡り変化するメディア』

【パネリスト】

津田環氏（テレビマンユニオン）

【略歴】 AbemaTV「Wの悲喜劇～日本一過激なオナナのニュース～」プロデューサー。フランスやスペインへの留学経験もあり、#MeTooで自身の体験を告白。

立野真央氏（NHK 名古屋拠点放送局制作部 ディレクター）

【略歴】 2017年 NHK 入社。「あさいち」など生活情報番組の制作を担当した後、SNSと放送を横断したスマホ発のジャーナルプロジェクト「不可避研究中」の立ち上げに携わる。

伊藤あかり氏（朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長）

【略歴】 2009年朝日新聞入社。奈良、徳島で記者、大阪で紙面編集を経験。社内の新規事業創出コンテストに応募し、2019年8月にサイトを立ち上げ、編集長に。

田中洋美氏（明治大学情報コミュニケーション学部准教授/司会）

【略歴】 専門は社会学，ジェンダー・スタディーズ。現在はソーシャルメディア，AIについて研究。主な著書・訳書は「ボディ・スタディーズ」（晃洋書房）など。

【主催】 朝日新聞社メディアデザインセンター「かがみよかがみ」編集部
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2020年10月24日（土）20:00-22:00（会場 19:50）

【会場】 オンラインイベント（Zoom 利用）

【コーディネーター・司会】

高馬 京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【視聴者数】 約 150 人（常時）



報告：高馬 京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

2020年10月24日20時から22時まで、明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンターと朝日新聞運営のエッセイ投稿サイト「かがみよかがみ」とが共催で、「ジェンダーを巡り変化するメディア」をテーマにオンラインシンポジウムを開催した。

登壇者は、明治大学准教授田中洋美氏、テレビマンユニオンの津田環氏、NHK「不可避研究中」担当ディレクター立野真央氏、朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長伊藤あかり氏、総合司会を本ジェンダーセンター運営委員の高馬京子が務めた。応募時の定員を上回り本学部の学生を中心に150名の学生が参加した。

本シンポジウム開催の狙いは、「MeToo」など、近年、社会全体でジェンダーを巡る問題が顕在化、特にメディア業界に注目が集まったことなどジェンダー問題が顕在化する社会情勢の中、これから企業に就職するなどして社会に出て働く学生に向け、ジェンダーにまつわる社会問題について考える機会を提供することを目的に開催された。また、ジェンダーとメディア研究の観点からの学術的な意義としても、メディア業界内でのセクハラ問題や、メディアが特定のジェンダー・イメージを再生産し、既存の性規範を強化している可能性、一般の人が発信する場を得ることで何が起きているか、メディア業界で働く当事者を招き、意見を交わすということがあげられる。

登壇者のプロフィールとして、テレビマンユニオン 津田環さんは、AbemaTV「Wの悲喜劇～日本一過激なオナナのニュース～」プロデューサーで、フランスやスペインへの留学経験もあり、#MeTooで自身の体験を告白している。また、NHK「不可避研究中」担当ディレクターは、立野真央さんで、2017年NHK入社。「あさイチ」など生活情報番組の制作

オンラインシンポジウム「ジェンダーを巡り変化するメディア」

10月24日(土) 20時～22時

参加費無料・事前申込制

テレビマンユニオン 津田環氏
NHK名古屋拠点放送局 制作部ディレクター 立野真央氏
朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長 伊藤あかり氏
明治大学情報コミュニケーション学部准教授 田中洋美氏

総合司会 明治大学情報コミュニケーション学部准教授 高馬京子氏

主催
朝日新聞社メディアデザインセンター「かがみよかがみ」編集部
明治大学情報コミュニケーション部ジェンダーセンター
問合せ先：明治大学情報コミュニケーション部ジェンダーセンター
HP: <https://www.meiji.ac.jp/info/gender/>
Eメール: gender@meiji.ac.jp / 03-3296-4436

10月5日(月) Oh-o!Meijiにて受付開始予定

近年、「MeToo」など社会全体でジェンダーを巡る問題が顕在化しています。特にメディア業界に注目が集まる中で、これから企業に就職するなどして社会に出て働く学生に向け、ジェンダーにまつわる社会問題について考えていただきます。今回の企画ではメディア業界内でのセクハラ問題や、メディアが特定のジェンダー・イメージを再生産し、既存の性規範を強化している可能性、一般の人が発信する場を得ることで何が起きているか、メディア業界で働く当事者を招き、意見を交わすという機会を提供します。

登壇者プロフィール

- テレビマンユニオン 津田環氏
- NHK名古屋拠点放送局 制作部ディレクター 立野真央氏
- 朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長 伊藤あかり氏
- 明治大学准教授/准司会 田中洋美氏

タイムスケジュール (2020年10月6日: 仮定)	参加費
19:30 受付開始	無料
20:00 挨拶：本学部長 神尾 隆久氏、情報コミュニケーション学部 高馬 京子氏	10/5(月)より
20:10 「かがみよかがみ」の歴史と未来 田中洋美氏	Oh-o!Meijiにて
20:30 「生活情報番組の進化」 伊藤あかり氏	受付開始・先着順
20:50 「日本社会のジェンダー意識」 立野真央氏	
21:10 「研究から見たメディアの未来」 田中洋美氏	
21:30 質疑応答セッション	
21:50 閉会	
22:00 かがみよかがみの未来	
22:30 閉会	

総合司会・高馬京子氏 明治大学准教授

朝日新聞社メディアデザインセンター「かがみよかがみ」編集部
HP: <https://www.meiji.ac.jp/info/gender/>
Eメール: gender@meiji.ac.jp



を担当した後、SNS と放送を横断したスマホ発のジャーナルプロジェクト「不可避研究中」の立ち上げに携わる。朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長伊藤あかり氏は2009年朝日新聞入社。奈良、徳島で記者、大阪で紙面編集を経験。社内の新規事業創出コンテストに応募し、2019年8月にサイトを立ち上げ、編集長となった。

牛尾奈緒美ジェンダーセンター長、伊藤編集長の開催のあいさつ、登壇者の紹介のあと、津田氏が自身が受けたセクハラの実験と、それをどのように告白し、会社がどのように変わりつつあるかについての報告「テレビ業界でのセクハラ告発と対応」、立野氏がジェンダーロールについて街頭で取材して実感した経験、NHK社内での状況の変化に基づいての報告「性役割への違和感を元にした企画発案」、また、伊藤氏が記者や編集者として感じた違和感や、朝日新聞社「かがみよかがみ」立ち上げと運営の中で、変わりつつある社内状況の変化についての報告「20代女性のリアルな声に接して」、そして本学部の田中洋美氏が「研究者から見たメディア状況の変化」について報告を行い、SNS が普及し、個人が発信しやすくなったことで、情動的なつながりや共感、新たな運動が起きやすくなった反面、怒りによる分断が課題になっていると指摘し、女性に対する性的嫌がらせやフェミニズムへの不十分な理解など、女性にとってデジタル空間が安全な場所になっていない現状を報告した後、グループディスカッションを行った。聴衆からの声として、「実際にメディア業界で働いている方の生の声を聴く機会がなかったので、とても貴重なお話だった」「メディア業界でも、まだ性差別の問題が多く残っていることに悲しくなったが、そのような問題を解決しようとする皆様の努力を聞き、感動した。」「メディアに左右され、自分がしたくてそう振舞っているのか分からないということに気が付く企画だった」など参加した学生からもこのイベントへの参加が重要な機会になったという回答が得られた。

「私はメディアが男女の役割を生産していると思っていた。しかし、メディア関係者が少しでも女性の地位を上げようと行動を起こしているのを知ることができただけでこのイベントに参加した意味があったのではないかと思う」というアンケートに対する意見もあったように、男女の役割を生産している、規範的ジェンダー表象を構築しているという視点でマスメディアの外側から批判されがちなマスメディアであるが、その内部で、その現状を提示し、またそれを改善するためにマスメディアとして動き始めていることをマスコミで働く当事者に報告いただいたことは学生にとっても、そして私たち研究者にとってもいろいろ考えさせられる非常に有意義な機会になったと考える。このような共同企画のきっかけをいただいた朝日新聞かがみよかがみ編集部の伊藤氏、またこの企画を実現するきっかけをくださり、当日コメントを報告してくださった田中洋美氏にお礼を申し上げたい。



特別講義・講演会



特別講義

「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」

【登壇者】

安瀨聖司氏

(アクサ・ホールディングス・ジャパン株式会社 代表取締役社長兼 CEO)

【略歴】1979年に三菱商事(株)に入社し、1999年米国の投資ファンド、リップルウッド日本法人、2001年UBS証券会社を経て、2006年GE コマーシャル・ファイナンス・アジアに上級副社長として入社。2007年GE コマーシャル・ファイナンス・ジャパン社長兼CEOに就任、2009年、GE キャピタル・ジャパン社長兼CEOを経て、2017年ビザ・ワールドワイド・ジャパン(株)代表取締役社長に就任。2019年にアクサ・ホールディングス・ジャパン(株)及びアクサ生命保険(株)の代表取締役社長兼CEOに就任。アクサの日本における保険3社(アクサ生命保険、アクサダイレクト生命保険、アクサ損害保険)の事業を統括。早稲田大学政治経済学部卒。ハーバード大学経営大学院修了。

田代桂子氏

(株式会社大和証券グループ本社 取締役兼執行役員副社長)

【略歴】1986年早稲田大学政治経済学部政治学科卒業後、同年大和証券株式会社入社。株式会社大和証券グループ本社経営企画部IR室長、コール・ネット企画部長を経て2009年に大和証券株式会社執行役員に就任。以降PTS担当、ダイレクト担当、金融市場担当、米州担当を歴任。2014年取締役兼専務執行役員就任後は海外副担当(米州担当)、大和証券キャピタル・マーケット アメリカホールディングスInc.会長を務め、現在は取締役兼執行役員副社長として海外担当及びSDGs担当を担当している。

※登壇順

【主催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2020年12月16日(水)14:00~16:00(開場13:50)

【会場】オンライン開催:ZOOM ウェビナー

【コーディネーター】

牛尾 奈緒美

(明治大学情報コミュニケーション学部教授・ジェンダーセンター長)

【視聴者数】約200名(常時)



本特別講義のテーマでもあった「ダイバーシティ」について、女性のキャリア形成、LGBTQs、障がい者支援等、安瀨氏と田代氏から企業トップとしての意識と実践、そして企業としての取り組みの変遷と今後の展望が示され、参加者からは就職活動の上で両氏のような経営者のいる企業に勤めたいとのコメントも寄せられた。参加者からも多くの質問が寄せられ、質疑応答の時間内にすべてに対応することはできなかったが、本特別講義は盛況のうち無事終了することができた。



学生企画イベント



コロナ禍で感じたジェンダーギャップ —大学生は何を感じたか—

【講演者】

伊藤あかり氏（朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長）

【略歴】2009年朝日新聞入社。奈良、徳島で記者、大阪で紙面編集を経験。社内の新規事業創出コンテストに応募し、2019年8月にサイトを立ち上げ、編集長に。

【主催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2020年11月17日（火）18:30～20:00（開場18:20）

【会場】オンライン開催（ZOOM使用）

【主旨】コロナ禍で改めてジェンダーギャップが表出。化粧の有無や服装について言及されるリモートセクハラ、ステイホーム期間中の配偶者からのDV、10代の望まない妊娠、と様々あります。

では、大学生はどうか。朝日新聞社「かがみよかがみ」の伊藤あかり編集長を招き、コロナについて書かれたエッセイを紹介してもらい、同世代がコロナ禍で感じている思いを共有します。

オンラインで集まった明大生同士で、最近強く感じるジェンダーギャップや大学生としてコロナ禍で感じたことについて、ブレイクアウトルーム機能を使い少人数で話し合います。

【来場者数】6名

報告：谷口 夏乃（明治大学文学部4年）

2020年11月17日（火）にZOOMを利用し「コロナ禍で感じたジェンダーギャップ —大学生は何を感じたか—」を開催し、6人が参加した。当初は6月ごろ開催予定だったが新型コロナウイルス禍の影響で開催が約半年ずれ込んだ。また、オンラインの開催に切り替え、学生企画として初の試みとなった。

開催のきっかけは、コロナ禍で気になった二つのニュースだ。一つは以前から聞くことが多かった「ジェンダーギャップ」。非正規雇用で働くシングルマザーの貧困、10代の望まない妊娠など、女性の社会的立場の弱さが顕著に表れたと報じられていた。もう一つは、緊急事態宣言による様々な影響についてだ。リモートワークや小中高一斉休校など、それぞれの年代や職業での影響が取り上げられた一方、大学生についてはあまりニュースで目にする



ことはなかった。この2点を、大学生はどう思っているのか聞くねらいで企画した。その上で、本イベントは「ジェンダー関連の話を友達とあまりできない」「コロナ禍で大変だったことを共有したい」「世の中の問題についてちゃんと考えたい」など、それぞれのモヤモヤや日常で抱えているものを打ち明けられる場を目指すことを目指した。

ゲストとして、朝日新聞社が運営するWEBサイト「かがみよかがみ」(<https://mirror.asahi.com/>)編集長の伊藤あかり氏をお招きした。「かがみよかがみ」ではジェンダーやコロナ禍に関して、明治大学の学生と同年代の人々を書いたエッセイを多数掲載している。伊藤編集長はエッセイ一つ一つに目を通しており、違う大学の学生、社会人など様々な経歴の人々の思いを聞くことができると思ったからだ。

目的達成のために事前アンケートを実施した。参加学生が何に興味を持ち参加を試みているのか把握し、当日の運営に役立てた。質問はコロナ禍で困ったこと・大変だったことと、最近気になっているジェンダーギャップについて尋ねた。一つ目に関しては、移動の制限によるコミュニケーション不足についての回答が多かった。二つ目は、性役割など身近な話題から緊急避妊薬や未成年婚などの社会的、文化的な話題まで様々な回答があり、参加学生の熱量に身の引き締まる思いであった。

イベント当日ははじめに開催経緯や趣旨、約束事を全員に共有した。約束事は三つあった。批判しないこと、相手の話をしっかり最後まで聞くこと、秘密厳守で外部に漏らさないこと。約束事を設定し、お互いに安心して話し合える場になった。そして、伊藤編集長からご自身の経歴や運営サイトである「かがみよかがみ」の紹介と続いた。サイト紹介の一環で本イベントと関連性が高いエッセイの紹介もあった。エッセイの内容に共感する部分があったのか、緊張した面持ちだったが頷きながら話を聞く学生もいた。

事前アンケートの結果を参考にして自己紹介もしてもらった。学生たちが、気になっているジェンダーギャップやコロナ禍のエピソードを話してくれた。自己紹介終了後、イベントのメインであるグループディスカッションをした。ZOOMのブレイクアウトルームを利用し、参加学生6人と伊藤編集長、筆者の8人で自由に議論した。「奢り、奢られ問題」や「女性らしさ、男性らしさ」、「脱毛に関する煽り広告」などを話し合った。アンケートの回答に比べると、日常生活で気になっていることへの言及が多いように感じた。同じ大学に通う大学生だが互いを知らないという程良い距離感であったためか、本音を交えた発言もあった。

学生企画
参加費無料

コロナ禍で感じたジェンダーギャップ —大学生は何を感じたか—

11/17 (火) 18:30~20:00 オンライン開催

朝日新聞社「かがみよかがみ」編集長 伊藤あかり氏

コロナ禍で改めてジェンダーギャップが表面化。化粧の有無や服装について言及されるリモートセクハラ、ステイホーム期間中の配偶者からのDV、10代の望まない妊娠、と様々あります。では、大学生はどうなのか。朝日新聞社「かがみよかがみ」の伊藤あかり編集長を招き、コロナについて書かれたエッセイを紹介してもらい、同世代がコロナ禍で感じている思いを共有します。オンラインで集まった明大生同士で、最近強く感じるジェンダーギャップや大学生としてコロナ禍で感じたことについて、ブレイクアウトルーム機能を使い少人数で話し合います。

主催
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
(<https://www.meiji.ac.jp/infocom/gender/>)

問い合わせ
明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
(gender@meiji.ac.jp)

10/26 (月)
Oh-o! Meiji にて
申込開始予定
(先着 20名)



こちらから発言を促したのは最初だけで、途中、発言が被りお互いで譲り合う場面もあった。予定時間の30分を超過するほど盛況となった。最後に伊藤編集長からイベントの総括があり終了した。

反省点は、申込者数に比べて参加者数がかなり少なかったことだ。何人か事前にキャンセルの連絡もあったが、15人参加予定のところ、実際は半分以下だった。オンラインのイベントは、申込のハードルは下がる一方で実際の参加者は減ることがある。どこかに足を運ぶという行動がないため予定が入っているという認識が甘くなり、忘れてしまうのだろうと推測する。今後も手軽さからオンラインイベントは増えることが予想される。今回の反省点が次につながることを期待したい。

開催にあたり、様々な事務手続きや当日の運営でお世話になったジェンダーセンターの皆様、企画発案段階から長きにわたり見守ってくださった田中先生、高馬先生、お忙しいところご登壇いただいた伊藤編集長、ご相談にのっていただいた「かがみよかがみ」編集部の皆様、当日運営を手伝ってくれた友人、最後に平日夜に時間を割いてご参加くださった学生の皆様に心から感謝申し上げます。

誰かの話や意見を聞いてみる、そしてお互いで考えてみる。そのような小さなやり取りが社会や環境を変えていくきっかけになると信じている。



研究プロジェクト



A 「組織におけるダイバーシティ・マネジメント」

牛尾奈緒美

今年度は、科研費の研究プロジェクト「企業の研究開発におけるジェンダー・ダイバーシティとパフォーマンス」(文部科学省 科学研究費基盤研究(C)(一般)研究代表者 牛尾奈緒美 令和2年度～6年度)に基づき、企業の研究開発部門の業績(同部門が発明する特許の質と量により評価)が、研究チーム内の人材多様性の程度とどのような関係性をもつのか、大量サンプルを用いて多変量解析を行い、いくつかの分析モデルを検出することで仮説検証を行った。組織内のダイバーシティ推進によるイノベーションの創出効果は既存の理論研究においても多数指摘されているところだが、特許に関する当該研究はこれまでになく、本研究の独自性を追求すべく来年度以降も継続的な調査研究を実施する予定である。本年度は、イノベーション・政策研究所(IIPR)主催の「イノベーションと政策研究」ワークショップにおいて、「発明者のジェンダー・ダイバーシティと特許の質」の口頭発表を行った。

また、毎年筆者が企画とファシリテーターを務め実施してきた大学主催による「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」を今年度はジェンダーセンター主催とし、Zoomによるウェビナー形式で実施した。講師として、アクサ・ホールディングス・ジャパン株式会社代表取締役社長兼 CEO の安淵聖司氏、株式会社大和証券グループ本社取締役兼執行役員副社長の田代桂子氏を招聘し、講演並びにパネルディスカッション、質疑応答にご対応いただいた。女性のキャリア形成、LGBTQs、障がい者支援等、多面的に人材多様性の価値について語られ、ダイバーシティ推進にあたっての問題点や具体的事例、経営者自身のキャリア形成に関する経験談など忌憚のない意見が出され、参加者との質疑応答においても有意義な議論が展開された。トップマネジメントのダイバーシティ推進に対する考え方や、組織全体にその価値観を注入するインクルージョンについて実務に基づく知見を収集でき、今後の研究に生かしていきたいと考えている。



B 「オンラインメディア空間における自己表象による ジェンダーとファッション」

高馬京子

ファッションとジェンダーを研究するスーザン・カイザーは、ファッションとは、様々な境界（階級、国、ジェンダー、年齢、人種など）を超えて「私は誰になろうとするのか」、アイデンティティを構築する装置と述べている（kaiser 2012）。ファッションという装置のほかにも、なりたい「私」になるために、ひとは、ダイエット、化粧品、整形、性転換手術などを用い、さまざまなメディア等で提言されてきた自らがなりたい理想像に近づけるために身体を変容させてもきた。現在、高度情報社会を迎え、インターネット上でのコミュニケーションが促進されている今日、ファッション情報は、それぞれオンライン上で多様に展開されるようになっていく。このようにメディアと時代の変遷とともに、ファッションを身に着けることで「なりたい私」はより実際の自分から遠くへ、より自由にその境界を超えることができるようになった。現在蔓延している COVID-19 によりリアル・ヴァーチャル空間が混在することとなったポストインターネットとしてのデジタルメディア上ではこの傾向はさらに加速されているのではなかろうか。今日、このようなデジタルメディア空間で「私」を見せるために、ファッションはどのような役割を担うのか。そのファッションを纏うことでオンライン上でいかなる境界を越え、どんな「私」になろうとしているのか。オンラインメディア上で、社会的規範に囚われることなくより多様な個性的な「私」を自己表象できているのか？それとも、冒頭であげたカイザーの提言した「境界」を超えても、社会的規範ジェンダー像を再強化するにすぎないのであろうか。以上の諸課題を考察するための第一歩として、今日のデジタルメディア空間におけるファッションと自己表象との関係について、2020年度特にこのコロナ禍、新しいファッション情報が発進され、かつそのファッションを身につける実践の場を提供する最先端のファッション・メディアとしての「あつまれ動物の森」を事例に、ファッションを身に付けることでいかなるアイデンティティを形成するのか、について文献、および基礎調査をおこなった。その結果、①ファッション雑誌として、ブランドの広報・広告の場として、また着用者のアバターを用いてのファッションの実践の場としてのオンラインゲームの新しいファッション・メディアとして可能性があるということ②オンラインゲーム上で、プレイヤーがアバターという「身体」を入手することで現実の身体を「放棄」し、「私」がだれかを提示するという、また、その際に、「私」を表すための装置としてファッションという物質面にのみ依拠する傾向が強かったということ、これにより、②アバターを用いることで性別、体形、年齢といった現実の身体に制限されはしないものの、そのアバターの特性に制限されたゲーム内の社会規範を選択し追従せざるを得ず、よりファッションという物質的なもののみ「私」を明示する結果につながることを示唆した。これらを基にさらに研究をすすめたい。一部報告を FASHION



STUDIES 主催 Think of Fashion™ オンライントーク #03「ゲーム空間」と「ファッションとアイデンティティ」で行った (Think of Fashion™ オンライントーク #03 | FASHION STUDIES)。



ジェンダーセンター運営委員一覧

○委員長

牛尾 奈緒美

○副委員長

宮本 真也

○学部内運営委員

江下 雅之

施 利平

高馬 京子

山内 勇

○学部外運営委員

高峰 修（政治経済学部）

藤本 由香里（国際日本学部）

○学外運営委員

出口 剛司（東京大学）

細野 はるみ（前ジェンダーセンター長）



ジェンダーセンター運営委員会議事録

第 1 回運営委員会 2020 年 4 月 17 日

第 2 回運営委員会 2020 年 7 月 21 日

第 3 回運営委員会 2021 年 1 月 22 日

2021 年度

2021
年度





定例研究会



ファッションとアイデンティティ ——ジェンダーやルッキズムの問題を考える

【講演者】 蘆田裕史氏（京都精華大学デザイン学部准教授）

【略歴】 1978 年生まれ。京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程研究指導認定退学。現在、京都精華大学デザイン学部准教授／副学長。著書に『言葉と衣服』（アダチプレス、2021 年）など。ファッションの批評誌『vanitas』編集委員、本と服の店「コトバトフク」の運営メンバーも務める。

【コメンテーター】 田中東子氏（大妻女子大学文学部教授）

【略歴】 1972 年生まれ。早稲田大学大学院政治学研究科博士課程修了。政治学博士。現在、大妻女子大学文学部教授および東京大学情報学環客員教授。専門は、メディア文化論、フェミニズム、カルチュラル・スタディーズ。著書に『メディア文化とジェンダーの政治学—第三波フェミニズムの視点から』（世界思想社、2012 年）、編著や共著に『ガールズ・メディア・スタディーズ』（共編著、北樹出版、2021 年）、など

【主催】 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】 2022 年 1 月 18 日（火）18:00-20:00（開場 17:55）

【会場】 オンラインイベント（Zoom 利用）

【コーディネーター・司会】

高馬 京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

【視聴者数】 約 100 人（常時）

報告：高馬 京子（明治大学情報コミュニケーション学部准教授）

今回、コロナ禍が始まって約 2 年ぶりに開催できたジェンダーセンターの研究会である。研究会としては初めてのオンライン開催となったが参加登録してくださった方々は、一般の方も含めて 170 名余り、そして実際には 100 名近い参加者とともに開催することができた。

ジェンダー・アイデンティティの構築においてファッションは重要な一装置といえる。

ファッションとジェンダー・アイデンティティ構築について考える際に「ルッキズム」の問題が昨今より議論されるようになってきた（『現代思想』2021 年 11 月号ルッキズム特集）。

そこで明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター 2021 年度第一回定例



研究会として、「ファッションとアイデンティティ——ジェンダーやルッキズムの問題を考える」と題して、ファッションとアイデンティティの関係を通して、ジェンダー、ルッキズムの問題についてどうアプローチするかファッション研究者である蘆田裕史氏（京都精華大学准教授/副学長）、またコメンテーターには上記『現代思想』でもメディア文化とルッキズムの関係について執筆された（メディア文化論、カルチュラル・スタディーズ、フェミニズム）田中東子氏（大妻女子大学教授）をお迎えし議論した。

まず蘆田氏の講演は、(1) ファッションについて考えること、(2) ファッションとはなにか、(3) ファッションと言語、(4) ファッションとアイデンティティ、(5) ファッションとジェンダー、(6) ファッションとルッキズムと6つのパートから成り立ち、それぞれ事例をあげながら、以下のようにファッションについてことばで定義された。

(1) ファッションについて考えること、においては、「社会経済、心理、生活、ジェンダー、文化、アイデンティティなど、さまざまな事象に関わるものであり、かつ私たちの誰もがファッションから逃れることができない。」という前提のもと「ファッションには興味がない」はありえないと指摘する。(2) ファッションとはなにか、について、衣服そのもの（=モノ）、服装（=着用者の実践）、流行（=社会における現れ）と定義している。

そして(3) ファッションと言語においては、ロラン・バルトを引用しながら、ラング：文法など外側から規定されているもの（例：日本語）、スタイル：個人の身体や環境から生まれるもの（例：話し方）、エクリチュール：ある社会的集団に認知された「型」を分類し、ファッションにも様々なエクリチュールが存在するとしている。また、(4) ファッションとアイデンティティについては、アーヴィング・ゴフマンの『行為と演技』、平野啓一郎『私とは何か——「個人」から「分人」へ』、R・D・レイン『自己と他者』を引用しながら、SNSと分人主義として本当の自分は存在するのか、という問いをたて、SNS以前は、アイデンティティを表現するためにもっとも効率の良いツールが服装であったのに対し、SNS以降は服装に頼らずとも、自分の生活や趣味嗜好を見せることができるようになったとする。

上記(1)から(4)までに行ったファッションとアイデンティティの定義を基とし、(5)としてファッションとジェンダーについて論を展開した。そこでは、男女が身に着ける色としてピンクとブルーの例とその変容などを提示し、衣服にこめられた意味は変容すること



を提示しつつ、ことばと異なり、服装は明日からでもすぐに変えられるものとして示唆した。そして(6) ジェンダーとルッキズムについて、外見による(というかあらゆる)差別は悪としたうえで、外見は(少なくとも)三層(身体、服装・髪型・化粧(→ファッション)、表情)に分け、「外見で判断すること」は必ずしも悪とは言えないとした。それは、アイデンティティの成立には承認が必要であるからと指摘する。ホネットによる「愛→好き嫌い、人権尊重→評価からも判断からも独立、業績評価→良し悪し」という承認の分類を提示しながら、「あの人は見た目がよい」と思うとき、見た目の「良し悪し」について評価しているのではなく、実際には単なる「好き嫌い」についての判断であると指摘する。すなわち、「良い外見」は存在せず(単に多くの人が「好き」なだけ)好き嫌いを評価に持ち込むことは悪ではないかと問いをたてた。そして、ルッキズムについて議論する際に、前述の存在する3つの外見についてきちんと分けて議論すること、そして、好き嫌い/評価判断を分けて議論する必要性を強調した。

これに対して、commentatorの田中東子氏は①ファッションの持つ解放/規範という側面について②ピエール・ブルデューを引用しながら、好き嫌い/よしあしは単純に分けられないのではないか③第2波フェミニズムを経て、第3波フェミニズムにおいてエリート女性たちが努力して外見をよくすることが彼女たちの能力主義とリンクしているのでは、というコメント、問いを提示した。それに対して、蘆田氏は①ファッションは「悪い意味」で軽いと考えられていて権力、他者から介入されてもいいと思われていることが問題であり、制服のような管理というのは、身体の介入と同様許されるべきではないのではないかとした。②については、田中氏が指摘するところの西洋・白人・男性によってつくられてきた問い返すべき客観性、という意味での「客観性」と主観性とに分けて、好き嫌い/よしあし、は分けられるのに分けてこなかったことが問題ではないかと指摘した。そして③メリトクラシーはよくない、とした上で、まとめでは、蘆田氏は、ファッションは定義されていないからこそ概念を問い直すこともできるし、また今回のようにジェンダーやルッキズムという問題を問い直すこともできると述べ、また、田中氏はファッションの軽薄さによってこそ、ラディカルさに加担し規範を揺さぶり、言葉なくしてショックを与えることができるのではないかとまとめた。

ファッション研究者である蘆田氏、フェミニズム研究者としての田中氏との議論のおかげで、アイデンティティ形成の際に重要な役割を担う一つの手段としてのファッションという切り口からジェンダーをめぐる諸問題、特に、規範、ルッキズムを中心にいろいろと考えるきっかけとなった。

コーディネーターとしても、ファッションは、社会において、規範となりつつも、その時代の規範を乗り越えようとチャレンジしてきたものであり、昨今では、ジェンダー、国境、年齢など様々な境界を乗り越えることで多様性を希求しているということ、そして、規範を乗り越えこの多様なファッションがメディアなどで語られることでこの多様性すらも規範になっていくというループに陥るのではないかと、自由と規範の違いとはなにかという問い



をもちつつ、また、ファッションは消費主義の中で語られるものであり、自由はなく、その一種「規範」に追従せざるをえないものではないかという「あきらめ」の境地もあった。しかし、本会で議論されたように、ファッションの「軽さ」ゆえに、ラディカルにジェンダー規範を揺さぶることができ、また、定義されていないからこそ概念を問い直し、ジェンダーやルッキズムといった問題を問い直すこともできるという意味で、ジェンダー研究においてファッションを検討することの重要性を再認識した会となった。



上段左：高馬京子准教授 上段右：田中東子氏
下段：蘆田裕史氏





特別講義・講演会



特別講義

「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」

【登壇者】

高原豪久氏

(ユニ・チャーム株式会社 代表取締役 社長執行役員)

【略歴】1986年三和銀行(現:三菱UFJ銀行)を経て、1991年ユニ・チャームに入社。1994年台湾法人の副董事長、1995年取締役就任。その後、購買本部、国際本部、営業本部、事業本部の責任者を歴任、経営戦略担当を経て、2001年代表取締役社長に就任。2004年より現職。2015年日本経済団体連合会生活サービス委員会委員長、2019年日本経営協会会長、2015年カルビー社外取締役、2021年野村ホールディングス社外取締役に就任。著書に『ユニ・チャーム式 自分を成長させる技術』(2016.ダイヤモンド社)他多数。

漆紫穂子氏

(品川女子学院 理事長)

【略歴】国語科教師を経て2018年より理事長に就任。教育再生実行会議委員(内閣官房)、行政改革推進会議構成員(内閣官房)。同校は「28プロジェクト~28歳になったときに社会で活躍する女性の育成」を教育の柱に、社会と子どもを繋ぐ学校作りを実践している。著書に『女の子が幸せになる子育て』(2020.大和書房)他多数。

白ばら日記 https://www.shinagawajoshigakuin.jp/blog_cat/principal/

※登壇順

【主催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2021年12月10日(金)13:20~15:20(開場13:15)

【会場】オンライン開催:ZOOM ウェビナー

【コーディネーター】

牛尾 奈緒美

(明治大学情報コミュニケーション学部教授・ジェンダーセンター長)

【視聴者数】約100名(常時)



報告：牛尾 奈緒美（明治大学情報コミュニケーション学部教授）

主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
 問合せ先：gender@meiji.ac.jp / 03-3296-4436

「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」特別講義

2021年12月10日(金)
 13:20-15:20
 (開場13:15)
 オンライン開催/Zoomウェビナー

企業トップの考える
 ダイバーシティ・
 マネジメント

講師：高原豪久氏
 ユニ・チャーム株式会社
 代表取締役社長執行役員

講師：漆紫穂子氏
 品川女子学院 理事長

※ご登録欄

主催：明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

企業トップの考える
 ダイバーシティ・マネジメント

一流企業経営者による豪華特別講演×牛尾教授ファシリテートによるシンポジウム

ダイバーシティとは、人種や性別、性的指向、年齢などに関する違いのほか、一人ひとり異なる価値観や能力、経験、知識など、いろいろな意味での多様性を指します。本イベントでは、これらを活用することで組織を強くする「ダイバーシティ・マネジメント」に効果的に取り組む企業トップの方をお招きし、お話を伺います。その際、登壇者之名と牛尾教授によるシンポジウムも予定されています。本イベントは、ご参加の皆様からの質疑応答の時間を設けた、教育向きのオンラインイベントです。

日時：2021年12月10日(金) 13:20-15:20 (開場13:15)

開催形態：Zoomウェビナー

参加費無料
 ・事前申込制(先着順)
 ・参加無料招待券
 申し込み(金)～申込みは右QRコードをクリック

https://www.kokugakuin.com/event/03_02/0201

講師：高原豪久氏
 ユニ・チャーム株式会社
 代表取締役社長執行役員

講師：漆紫穂子氏
 品川女子学院
 理事長

牛尾奈緒美教授
 明治大学情報コミュニケーション学部教授

2021年12月10日に特別講義「企業トップの考えるダイバーシティ・マネジメント」を主催した。今年で四回目となる本会は、昨年に引き続きオンラインで開催された。当日は学生を中心とした幅広い参加者層となり、常時視聴が100名を超える盛況となった。

本会はユニ・チャーム株式会社代表取締役・社長執行役員の高原豪久氏、品川女子学院 理事長の漆紫穂子氏お二方によるご講演と牛尾をまじえたディスカッション、両氏の講演前には牛尾ゼミナール3年生の学生によるプレゼンテーションも行われた。

本特別講義のテーマでもあった「ダイバーシティ」について、高原氏からは企業経営、漆氏からは学校教育の観点から、組織のトップの立場としての意識と実践、そして組織全体としての取り組みの変遷と今後の展望が示された。質疑応答の時間には、新しい取り組みを推進するにあたっての困難が生じた場合、あるいは現時点で解決が困難であると判明した場合、どのように乗り越えていくべきかといった質問がなされ、両氏から忌憚のない回答がなされるなど、盛況のうちに終了した。



上段左：漆紫穂子氏 上段中央：牛尾奈緒美教授 上段右：高原豪久氏
下段：牛尾奈緒美ゼミナール生



他機関との連携・協力



シンポジウム 社会に蔓延するミソジニー —ニッポンのミソジニー—

【シンポジスト】

上野千鶴子氏（東京大学名誉教授）

【略歴】東京大学名誉教授／明治大学国際日本学部特別招聘教授。京都精華大学助教授等を経て、1993年東京大学文学部助教授就任。1995年から2011年まで、東京大学大学院人文社会系研究科教授を務める。現在、認定NPO法人「ウイメンズアクションネットワーク（WAN）」理事長。日本のフェミニズム・ジェンダー研究の第一人者であり、2019年の東京大学入学式での祝辞が話題を呼んだ。サントリー賞を受賞した『近代家族の成立と終焉』のほか、本連続講義のタイトルともなっている『ニッポンのミソジニー』『家父長制と資本制』『ケアの社会学』『発情装置』など多数の著書がある。

牛尾奈緒美氏（明治大学教授）

【略歴】明治大学情報コミュニケーション学部教授。ジェンダーセンター長。慶應義塾大学卒業後、フジテレビジョンに入社。アナウンサーとしてニュースや情報番組キャスターを務める。結婚退社、出産を経て慶應義塾大学大学院博士課程を修了。1998年から明治大学の専任講師となる。以後、助教授を経て2009年より教授。専門は経営学、人的資源管理論で、働く女性の能力発揮の問題に取り組む。一児の母。近著に、『女性リーダーを組織で育てるしくみ—先進企業に学ぶ継続就業・能力発揮の有効策』（中央経済社）などがある。

【主催】明治大学国際日本学部

【共催】明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター

【日時】2021年12月18日（土）18:00～20:00

【会場】オンライン開催（ZOOM使用）

【コーディネーター・司会】

藤本由香里（ジェンダーセンター運営委員、国際日本学部教授）

【来場者数】約300名



ー]「性暴力とフェミサイド」に分けて語られたもので、セジウィックの“ホモソーシャル”“ホモフォビア”“ミソジニー”の三点セットを下敷きに、この社会にある性差別的な構造的暴力の仕組みを解き明かすとともに、完全な合意による性行為からレイプまで、性暴力は連続体であり、その中での「状況の定義権」の重要性、「セクハラ」という言葉がようやく定着していったように状況の「名付け直し」がいかに重要であるかが、従軍慰安婦の問題や、女性を狙った殺人的暴力＝フェミサイドなども例に引きながら語られ、問題発言などに気づいたらその場でイエローカードを出す、という実践的な提言がなされた。

続いて、牛尾奈緒美氏より、自身が経験してきたミソジニーがきわめて率直に語られた。アナウンサー時代もお茶くみはデフォルトだったこと、結婚退職してアナウンサーを辞めた後、なにか違う……と感じ始めたこと。一念発起して大学院に入り、本気で大学に職を得て研究者になろうとしていたときのこと。そして研究者になった後のこと。女性アナウンサーから専業主婦、そして研究者と、新しいキャリア構築をしていく中で牛尾氏が直面し、そして忘れようとして看過してきた部分、すなわち、ミソジニーに端を発していたのであろう対応や批判、軋轢を振り返り再発見をしながらの講演となった。この講演のなかで、とくに牛尾氏が「若さや新鮮さで評価されない、積み重ねや熟練が評価される仕事」として大学教授を選んだと語ったことが印象的だった。牛尾氏はさらに、現在の職場における女性管理職の少なさやミソジニーの実態、テレビ局を中心としたメディアの問題、そしてこれからの企業に求められるダイバーシティ・インクルージョンはミソジニーを克服しなければ実現しないのに、それがなかなか浸透しないことも指摘した。牛尾氏自身のキャリアをミソジニーの構造で再分析する過程で、女性活躍が進まない理由は女性の能力や経験ではなく、奥に潜む社会構造・価値観の存在があり、その一つとしてミソジニーの存在を抜きにして語れないことが改めて強調された。

これに対し上野氏が、「以前からの疑問なのだが、日本の会社は経済合理性よりも、これまでのホモソーシャルな組織文化を変えたくないという不合理を優先しているのではないか」という疑問を出し、牛尾氏もそれを肯定する形で、現在の企業の問題点が2人のやり取りで活発に語られた。さらに、上野氏の1～4回の特別講義を聞いての疑問として、「性差別とミソジニーとはどう区別されるのか」という質問に上野氏が「性差別は構造。ミソジニーは実践」と、端的に答える場面もあった。

最後に、藤本ゼミと牛尾ゼミから学生が一人ずつ、パワポを使って上野氏に質問を投げかけた。最初の質問は、<「弱者」とされる男性たちの辛さ、憎しみや憤りが、女性に向かわないようにするためにはどうすればよいのか?>。次の質問は、<無知なふりをするほうが物事が容易に進むことがある。そうしたくないのに、そうした方が楽。このこととどう折り合いをつけていったらいいのか><フェミニズムを知ると、今まで気づかなかったことに気づいて辛くなることもある。そのような場合、先生方はどう対処しているのか>。

このあとも、学生たちからの質問を優先して受け、学生たちからのさまざまな質問に



上野氏が次々と答えていった。終了後に感想アンケートを求めたのだが、「学生たちとのやりとりがとてもよかった」という声が予想外に多く、連続講義の最終回として学生も交えて双方向で行なったこのシンポジウムが、外部の人に、明治大学の学生を印象づける結果となったことが感じられた。学生たちから寄せられた感想では、自分のこれまでの具体的な経験を織り交ぜて語る熱い感想が多く、＜経験が構造に結びあわされていく授業で、「そういうことか！」という感情が止まりませんでした＞＜ミソジニーを改善する上で大事なことは、自身が生活する中でそれらと遭遇した際に、しっかりと間違いを指摘することだ、とわかった＞＜今まで無力感を感じてきたけれど、はじめて私にもできることがある！と感じた＞等の感想が寄せられ、今回の連続講義と最終回のシンポジウムが、これまでにない深い学びとなったことが感じられた。



左：上野千鶴子特別招聘教授 右：牛尾奈緒美教授





研究プロジェクト



A 「企業のダイバーシティ推進の実態調査」

牛尾奈緒美

ダイバーシティ・マネジメントの推進を先進的に取り組む先進企業に対して、大規模な従業員調査を行い、同取り組みによるイノベーション創出の効果を多変量解析により分析を行った。また、従業員個人の働き甲斐や、就業意識など組織的效果や、生産性など、具体的な効果の有無についても統計的な手法を用いて検証を行った。

調査にあたり既存研究のサーベイを行ったところ、従業員一人ひとりが、高い帰属意識と自立性をもった組織は、インクルージョンが成立する組織、いわゆる「高包摂組織」と位置付けられる。高包摂組織は、ダイバーシティを生かし、従業員の会社や仕事に対するポジティブな評価や高いパフォーマンスを生み出すと捉えられる。しかし、その形成要因や構成要素やメカニズムについての詳細はわかっていないため、本調査では、高包摂組織の条件や形成要因のメカニズムを明らかにすることを目的とした。調査対象である大手銀行、大手保険会社、大手食品会社、大手娯楽サービス会社、計4社の従業員に対して意識調査を実施し、回収された計6354名の回答データをもとに分析を行った。

SDGsの目標達成をはじめ、昨今は企業のガバナンスやコンプライアンスに対する社会的要請も強まっており、高包摂組織とダイバーシティ・マネジメントの推進がどのような関連性を持ち、そのことが課題解決にどのような影響力をもちうるのか、ダイバーシティや高包摂組織による会社全体としての効果についてもさらに追及をしていきたい。



**B 「デジタルメディア時代の流行現象を通して形成される
規範的ジェンダー像：
ファッションメディアにおけるマッチングアプリ利用者として
構築されるジェンダー像を事例に」**

高馬京子

メディアにおけるマッチングアプリ利用者として構築されるジェンダー像を事例に

本プロジェクトは、デジタルメディア時代の流行現象を通して形成される規範的ジェンダー像について考察するため、ジェンダー像構築を検討するときに重要な一要素である恋愛に着目し、マッチングアプリを事例に検討した。

デジタルメディア時代の流行ファッション現象として浮上したマッチングアプリを通しての恋愛、婚活の流行現象が存在する。生活空間の中で実際に会うのと異なり、これらマッチングアプリを通してオンライン上で人と出会い、恋愛するなど、様々な恋愛、婚活の形態の変化が見受けられる。このようなマッチングアプリをめぐるメディア、特に、ファッションメディア記事上では、どのようなマッチングアプリを利用して恋愛・婚活をするジェンダー像が構築されているのであろうか。調査方法として、1. 日本の恋愛、婚姻（出会い）の歴史（日本の恋愛、結婚観）、マッチングアプリ、デジタルメディア時代の親密性に関する関連論考を調査、2. 代表的な年代別マッチングアプリの広告ページにおける規範的ジェンダー像の構築、3. 日仏のファッションメディアにおける従来の恋愛、4. 女性ファッション雑誌のマッチングアプリに関する記事、漫画、テレビなどにおける理想的ジェンダー像の構築の分析を行い、「マッチングアプリ」をめぐるメディア上における規範的ジェンダー像がいかに構築されているのか、それを生み出す今日の高度情報社会のメカニズム、プロセスを明らかにする第一歩としての調査をすすめた。また、同性愛者に関する研究との比較の視点から、文化人類学者砂川秀樹氏に「ジェンダー／セクシュアリティ研究の視点をめぐって～オープンリーゲイの文化人類学者として～」(情報コミュニケーション研究科特別講義)の話の伺い、本研究の参考とした。結論として、20代から40代向けのいくつかのWEB女性史では、様々なリスクも内包するマッチングアプリにおける「婚活」「恋活」、またそれらから派生して自分らしさの探求、向上心など違うものへと様々な欲望が渦巻く場で、一般情報誌、男性誌上で構築されている男性側の欲望、マッチングアプリ会社が織りなすだろウセルトーという戦略に対し、「被害者」ではなく、「戦術的」にリスク回避をしながら、どう自分の流動していく欲望を「婚活」「恋活」を通して見極め、選択し、発展させ粘り強く実現させていくために主体的・個人的選択を実践するユーザー像がメディア内で形成されている傾向が伺えるということ、そして、その像は様々な思惑のあるマッチングアプリという場をエンパワーメント空間にしているようにも見受けられた。その反面、ポストフェミニズムの女性の主体的選択という視点から考えると、このようにメディア空間でなされた主体的選択ができる／課される多様な欲望を有する20代-40代のマッチングアプリ女性利用者



表象は、マッチングアプリを年齢制限のエンパワーメント空間でもあり、かつ主体性の実践と、特に結婚、またそれ以外の欲望達成が困難、リスクが常にあるといったジェンダー不安の標準化を促す抑圧装置という表裏一体の場へと促しているのではないかと結論づけた。



ジェンダーセンター運営委員一覧

○委員長

牛尾 奈緒美

○副委員長

宮本 真也

○学部内運営委員

江下 雅之

施 利平

高馬 京子

山内 勇

○学部外運営委員

高峰 修（政治経済学部）

藤本 由香里（国際日本学部）

○学外運営委員

出口 剛司（東京大学）

細野 はるみ（前ジェンダーセンター長）



ジェンダーセンター運営委員会議事録

第 1 回運営委員会 2021 年 4 月 16 日

第 2 回運営委員会 2021 年 6 月 11 日

第 3 回運営委員会 2021 年 10 月 27 日



業績一覧



ジェンダーセンター運営委員業績一覧 (各 50 音順)

論文

- Hajime Ushimaru, Naomi Ushio, Shima Nagano, Toshio Takagi, Masahiro Hosoda and Bongju Kim, 2021, “A Pilot Empirical Study on the Effectiveness of Inclusive Leadership and Inclusion Climate”, *Journal of Business Science*,『ビジネス科学研究』第 10 号, pp. 31-46.
- Hajime Ushimaru, Naomi Ushio, Shima Nagano and Bongju Kim, forthcoming, “Multi-level analysis of the impact of inclusive behavior of top management and workplace supervisors on inclusion climate”, *Meiji BUSINESS REVIEW*, 69(1). (=『経営論集』(明治大学経営学部)).
- Hajime Ushimaru, Naomi Ushio, Shima Nagano and Bongju Kim, forthcoming, “An Empirical Study of the Simplified Categorization-Elaboration Model of Workgroup Diversity”, *Meiji Business Review*. (=『経営論集』(明治大学経営学部)).
- 高馬京子, 2021, 「デジタルファッションメディア空間における視線と言説—インスタグラム・ファッション・規範的女性像」高馬京子・松本健太郎編著『〈みる／みられる〉のメディア論：理論・技術・表象・社会から考える視覚関係』ナカニシヤ出版, 123-139 頁.
- 廖静ショウ, 高馬京子, 2021, 「越境文化としての化粧：チャイボグにみる日中のトランスナショナルコミュニケーション」『日中文化のトランスナショナルコミュニケーション』江藤茂博, 牧角悦子監修, 松本健太郎他編, 217-231 頁.
- Kyoko Koma, 2021, "Kawaii Fashion Discourse in the 21st Century: Transnationalizing Actors," S. Cheang, E. de Greef and Y. Takagi. (Eds.), *Rethinking Fashion Globalization*. Bloomsbury, pp. 131-145.
- 高馬京子, 2022, 「フランスのファッション・メディアにおける規範的女性像の構築・伝達」高木陽子・高馬京子編著『越境するファッション・スタディーズ』ナカニシヤ出版.
- Kyoko Koma, 2022, “Fashion Trends and the Construction of an Idealized Femininity in Modern Urban Japan” In *Gendered Cityscapes-Respectives on Identity and Equity in Urban Asia* edited by Divya Upadhyaya Joshi, Hiromi Tanaka, Chompoonuh K.Perpoonwiwat, New Delhi, Rawat, pp.78-92.
- 高馬京子, (近刊), 「デジタル社会におけるファッションメディアとジェンダー」高馬京子・高峰修・田中洋美編著『21 世紀の多様性と創造性』明治大学出版会.
- 高馬京子, (近刊), 「超域文化としてのファッション」明治大学情報コミュニケーション学部編『情報コミュニケーション学への招待』ミネルヴァ書房.



高馬京子, (近刊), 「mousmé から shōjo へ: フランスメディアにおいて構築, 「継承」される未熟なかわいい日本女性像」藤原貞朗・村井則子・高木陽子・高馬京子編著『ジャポニズムを考える (仮)』思文閣出版.

*****講演*****

牛尾奈緒美, 2021, 「SDGs 時代の女性の活躍とダイバーシティ推進の意義」, 東京西ロータリークラブ主催卓話講演会, 於ホテルオークラ東京, 2021年4月9日.

牛尾奈緒美, 2021, 「ミラクルビット」, フジテレビジョン, 出演 (ジェンダー・マネジメント研究紹介), 2021年10月18日, 10月25日.

牛尾奈緒美, 2021, 「SDGs 時代に求められる企業変革: ダイバーシティ・マネジメントの推進と女性の活躍」, 株式会社ブルーム主催<2021年第三期>講演会, 於帝国ホテル東京, 2021年10月22日.

牛尾奈緒美, 2021, 『フォーラム 81 大いに語ろう! 早稲田 DE 教育 早稲田 DE 環境』, 稲門祭・教育パート, 於大隈記念講堂, 2021年10月24日 (無観客開催の上, YouTube でライブ配信).

牛尾奈緒美, 2021, 「メディア企業における女性の活躍とダイバーシティ推進の意義」, 読売テレビ第5回全社員対象「人権研修会」, 2021年11月8日 (オンライン配信)

牛尾奈緒美, 2022, 「ジェンダーの枠を越え自分発のリーダーシップを切り拓く: アナウンサーが大学教授に, 専業主婦からの再出発」, お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所主催講演会, 2022年1月21日 (オンライン配信).

牛尾奈緒美, 2022, 「ポストコロナのグランドデザイン—これからの大学経営」, グロービス経営大学院主催『G1 サミット』, 2022年3月20日 (リアルとオンライン同時配信).





編集後記

新型コロナ感染症が蔓延して、2年が過ぎてしまった。コロナ禍は確実に、私たちの社会的距離に変化をもたらしている。ジェンダーセンターで考えたいことはいろいろある。かつてさまざまな機能や役割がそこから分化し、現代ではその意味さえ問われることもある家庭という空間に、再度、家庭のメンバーは引きこもり、オンラインで労働を、教育を、社交を余儀なくされる頻度が増えている。そう書けばニュートラルだが、労働を失い、コミュニケーション的な教育や双方向的なつき合いを失って、コロナへの不安だけではなく、生活の不安も加わり、家庭が過剰にストレスフルな場所になっていることも少なくはない。そのストレスフルな親密圏にいる人々がSNSから発するメッセージが、ガス抜きの暴力性を帯びてしまうことも十分に考えられる。センターがテーマとする「ジェンダー」「ダイバーシティ」「承認」をめぐる言説状況にも、影響はあったはずである。

そうした危機が去らぬまま、戦争である。ウクライナの男性は戦闘のために残り、多くの女性と子どもたちは国境を越えていこうとするのだが、そこでは戦時総動員法という壁があるらしい。身分証明書の性別と自分の性が一致しないためにとどまらざるを得ないトランスジェンダーの人々もいるという。また、アフリカ系の住民たちも、国境で入国を拒否されている。危機は私たちの生活を変えるが、同時に既存の傾向をどぎつくして見せる。危機は避けるに越したことがないが、それは日頃はなんでもない小石を巨石に変えてしまうこともある。戦争だろうと、自然災害であろうと、弱いところに常に苦痛は集中する。他者の危機からですら、私たちは学ばなければならない。

ジェンダーセンター運営委員（広報担当）・副センター長 宮本 真也

コロナ禍となり2年が過ぎた。その間、大学授業や会議等、多くがオンラインで開催されるようになった。2021年度の本センターも運営委員、事務局が中心となり、外部のご登壇者の皆様、参加者の皆様のおかげで、報告書にもあるようにオンラインを駆使しながら大変有意義なシンポジウム、特別講義、学生企画を開催することができた。私も、コロナ後初の定例研究会を担当、第6波の中、オンラインで開催したおかげもあり、東京近郊以外の方々にもご参加いただき充実した議論を展開できた。対面開催だからこそ伝えあえるものがあるのも確かで、近い将来の対面での研究会実現を願いつつも、オンライン開催の利点を生かす活動も模索していければと思う。

ジェンダーセンター運営委員（広報担当） 高馬 京子



ジェンダーセンターではこれまで対面開催を基本としてきた。その基本が大きく揺るがされ、(あらゆる機関がそうしたように)オンライン開催に活路を見出したこの2年、「対面」を基本としてきた遍く環境がここまで変化するとは予想だにできなかった。今まで意識してこなかった当たり前の「対面」での開催に困難を伴うようになった状況下、その当たり前が瓦解した向こうに現れたのは、対面が“縛り”となって企画参加が叶わなかった人々の存在だ。オンライン開催によって、対面であったならば来られなかっただろうと口にする方々の参加も増えた。

「二流は環境の変化に対応できない。一流はそれに逆らわない。そして超一流はそれを利用する」——自身の好きなサッカー漫画『ファンタジスタ』（草場道輝・著）中のセリフである。事務としては3年の在職期間ではあったが、目まぐるしく変化する環境と情勢の中、ジェンダーセンターが、この変化を利として活かしてくれることを願ってやまない。

ジェンダーセンター事務局 石田 沙織



ジェンダーセンター年次報告書（2020・2021年度）

- 2022年3月31日発行
- 編集・発行 明治大学情報コミュニケーション学部ジェンダーセンター
- 印刷 株式会社プリントパック
- 連絡先 gender@meiji.ac.jp